

IV-51

積雪寒冷都市における憩い空間の利用者意識評価に関する研究

北海道大学大学院 ○学生員 石田 宜久
 北海道大学大学院 正 員 高野 伸栄
 北海道大学大学院 正 員 萩原 亨
 北海道大学大学院 正 員 加賀屋誠一

1. 研究の背景と目的

積雪寒冷都市に住む人々の冬期の生活は、気候状況の影響による制約を大きく受けていることはいうまでもない。長く厳しい冬期間を快適に過ごし、活動を活発にすることは、そこに住むすべての人々が望んでいることである。

また、まちには「住む、働く、学ぶ、憩う」という機能がある。これらすべての機能において、ゆとりを備えることが求められるが、特に「憩う」機能においてもゆとりや潤いを備えることが大切である。まちは、単なる効率第一ではなく、まちで過ごすこと自体がわくわく楽しく愉快で、かつ落ち着くことができる場であることが重要であると考ええる。

このような視点から札幌市の都心部を眺めると、そのような空間として夏は大通公園というオープンスペースがあるが、冬にはそのような「憩う」機能を満たしてくれる空間はあまり見当たらないように思う。そこで、このような現状に対し人々は不満を感じているのではないか、また冬期にも利用できる憩い空間が求められているのではないかと考えた。ここで「憩い空間」とは、休憩行為を満足させる空間であり、その他に遊びや語り、ふれあいの場として利用できる空間と定義する。

そこで本研究では、積雪寒冷都市に住む人々が冬期にも利用できる憩い空間を必要と考えているかを検証し、また憩い空間にとって重要とされる要素を明らかにすることを目的とする。

2. 調査の内容と方法

本研究では、表1のような内容で憩い空間に対する意識を探る方法としてアンケート調査を実施

した。

調査は、平成10年1月に北海道大学の学生を対象にしておこなったところ、総回収数は425票であった。

表1 アンケート調査の内容

調査項目	内 容
個人属性	・性別
都心部(大通駅周辺)への外出	・出かける頻度、目的 ・利用する交通機関
憩い空間の利用	・大通公園の利用方法 ・憩い空間に対する意識 ・重要度、現状満足度 (5段階評価)

3. アンケート調査の回答結果

(1) 回答者の性別

性別は、男性が367人、女性が58人であり、回答者のほとんどは男性であった。

(2) 都心部(大通駅周辺)への外出

図1に示すように、都心部へ出かける頻度は、夏、冬ともに「月2、3回」が最も多くなっており、全体では冬になると夏に比べて出かける回数が少なくなる傾向にあることがわかる。また、特に「買物」、「娯楽」を目的に出かける頻度についても、図2のように同様の傾向が示されている。表2に示されるように、都心部へ出かける目的は、夏、冬ともにほとんどが「買物」、「娯楽」であり、合わせて9割近くを占めている。都心部へ出かけるときに利用する交通機関は、表3のように、夏は「自転車」が約半数で最も多く、次に「地下鉄」が続くのに対し、冬は「地下鉄」が最も多く8割以上を占めている。

A Study on User's Conscious Valuation of a Space of Relaxation in a Snowy and Cold City
 By Norihisa ISHIDA, Sin-ei TAKANO, Toru HAGIWARA, Seiichi KAGAYA

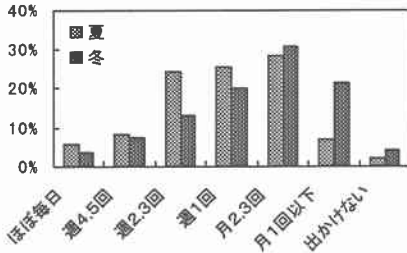


図1 都心部へ出かける頻度

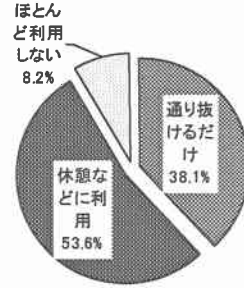


図3 夏の大通公園の利用

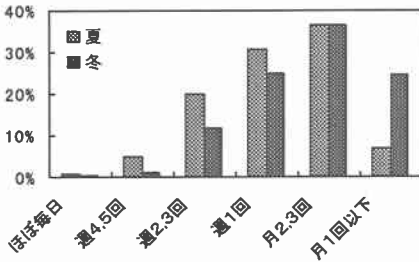


図2 都心部へ出かける頻度 (買物、娯楽)

表2 出かける目的 (複数回答)

季節	買物	娯楽	通学
	夏	51.5%	35.5%
冬	アルバイト	観光	その他
	5.2%	1.9%	1.7%
冬	買物	娯楽	通学
	53.1%	33.5%	4.7%
冬	アルバイト	観光	その他
	6.2%	1.5%	1.1%

表3 利用する交通機関

季節	徒歩	自転車	地下鉄	JR・バス・市電	自動車・バイク
	夏	5.4%	48.9%	39.1%	3.4%
冬	8.8%	4.3%	81.2%	4.3%	1.5%

(3) 大通公園の利用

夏の大通公園の利用は、図3のように、「ほとんど利用しない」と回答している人が1割にも満たないことから、9割以上が何らかの方法で利用していることがわかる。そのうち、「通り返けるだけ」に利用する割合は4割弱で、半数以上は「休憩などに利用」している。

また、そのときの具体的な利用方法は、表4に示すように、「散歩する」、「座る」、などとなっている。

表4 大通公園の利用方法 (複数回答)

散歩する	座る	スポーツをする	友人と会話する	待ち合わせ
21.1%	19.0%	16.1%	13.7%	10.6%
飲食する	寝る	遊ぶ(運動する)	本を読む	その他
9.7%	4.9%	2.3%	1.9%	0.6%

(4) 憩い空間に対する意識

次に、図4のように、「憩うことに注目して冬の現状に満足か」の質問には、全体の4割強が「満足」であるのに対し、約2割が「不満を感じている」と回答している。また、図5のように、「憩い空間が欲しいか」の質問では、25%以上が「憩い空間が欲しい」と回答している。

また、どちらの質問においても「わからない」の割合が高く、ともに3割を上回っている。この理由として、普段あまり「憩う」ということについて意識していなかったために、このような質問に対してどちらとも答えられなかったためと考えられる。

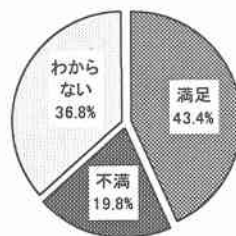


図4 冬の現状に満足か

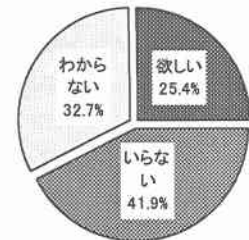


図5 冬に憩い空間が欲しいか

上記の2つの質問において、回答結果を考察してみると、それぞれ「満足」、「足りない」と回答した人は、現状で十分に「憩う」機能を満たす空間があると考えているか、または夏においても憩い空間を必要としていない人であると考えられる。反対にそれぞれ「不満」、「欲しい」と回答した人は、冬には憩い空間が少ないことに不満を感じ、そのような空間を求めていると考える。

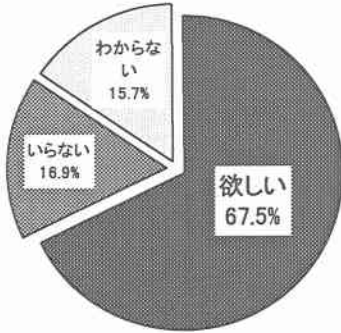


図6 憩い空間に対する意識の関係

全体としては、それぞれ「不満」、「欲しい」と回答した人はそれほど多くなかったが、このような意見を持った人が少なからずいることがわかる。特に、「不満」と回答した人が高い割合で「憩い空間を欲しい」と思っていることから、憩い空間が少ないことが不満になっていると考えられる。

(図6)

また、「不満」と回答した人の具体的な不満事項をみると、「ただで休めない」、「座るところがない」、「気軽に休めない」などが多く挙げられており、休む場所が少ないことが大きな不満となっている。(図7)

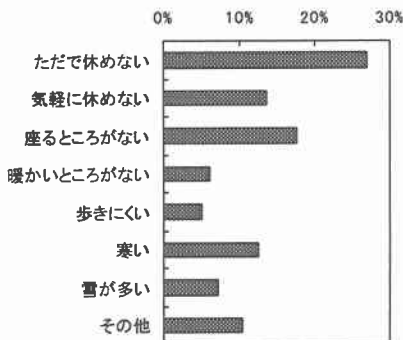


図7 不満事項

4. アンケート結果の考察

(1) 回答者の属性や行動からの考察

憩い空間に対する意識と回答者の属性や行動には、何らかの関係があるのではないかと推測し、考察をしたところ、「性別」、「都心部へ出かける頻度」、「夏の大通公園の利用」などと憩い空間に対する意識の回答結果には、独立性の検定で有意な差がみられた。

a) 性別

性別については、図8に示すように、女性は「欲しい」の割合が「知らない」を上回っており、女性に限っては冬に憩い空間が求められていることがはっきりとわかる。

b) 都心部へ出かける頻度

図9に示すように、冬に「買物」、「娯楽」を目的として都心部へ出かける頻度から「不満」と回答した人の割合をみると、出かける頻度が高い人ほど「不満」を感じている割合が高くなることがわかる。また、「わからない」と回答した人は都心部へ出かける頻度が比較的低いこともわかる。これについては、「欲しい」と回答した割合についても同じような結果がみられ、都心部によく行く人ほど「不満」を感じており、また憩い空間を求めているといえる。

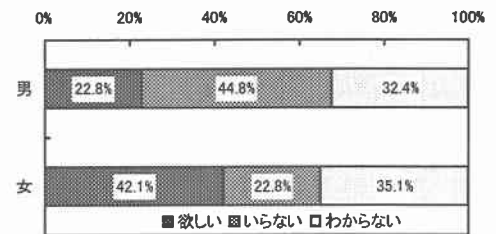


図8 性別による憩い空間に対する意識

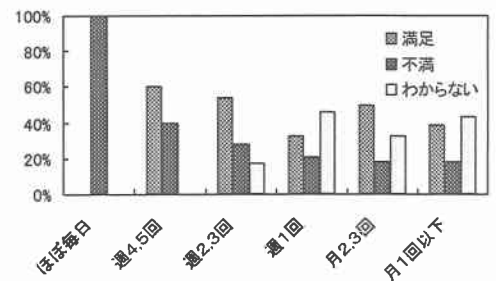


図9 都心部へ出かける頻度による憩い空間に対する意識

c) 夏の大通公園の利用

「不満」や「欲しい」と回答した人が夏に大通公園をどのように利用しているかを調べたところ、「休憩などに利用」している割合が高くなっていることがわかる。つまり、夏に大通公園を「休憩などに利用」している人は、冬にもそのような空間を求めており、そのような点から冬の現状に不満を感じていると考えられる。(図10)

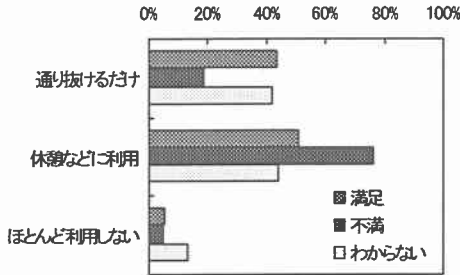


図10 夏の大通公園の利用による憩い空間に対する意識

(2) 憩い空間にとって重要とされる要素

ブレインストーミングにより得られた10項目について、それらが「憩い空間にとってどのくらい重要であるか(重要度)」、また「さっぽろ地下街においてどのくらい満足されているか(現状満足度)」を、それぞれ5段階評価で質問した。

全体では「座ることができる」が最も重要度が高いのに対し、現状満足度は最も低くなっている。また、同じようなことが「空気がきれい」、「気温が快適である」などについてもいえる。このように、重要度が高い要素において現状満足度が低いことから、冬期に多くの利用が予想される地下街が、「憩う」機能を満たしてくれる空間として充分ではないと考えられている。(表5)

表5 重要度と満足度の平均値

質問項目	重要度	現状満足度
(1)周囲の景色が見渡せて開放的である	3.83	3.20
(2)座ることができる	4.38	2.78
(3)充分広いスペースである	4.15	3.31
(4)緑が多い	3.99	3.24
(5)活気や賑わいにふれられる	3.11	3.32
(6)空気がきれい	4.08	2.79
(7)都心部に近い	3.85	3.84
(8)お金をかけずに時間をつぶせる	4.15	3.06
(9)気温が快適である	4.18	2.99
(10)公共交通機関の結節点から近い	4.30	3.83

また、「不満」や「欲しい」と回答した人は、「座ることができる」や「お金をかけずに時間をつぶせる」ことを憩い空間に特に重要であると考えており、その要素においてはさっぽろ地下街に対して不満を感じている。具体的な不満事項においてもこの2つに対する不満が多かったことから、憩い空間を考えていくうえで非常に重要な要素と考えられる。

5. まとめ

以上の考察から、全体では冬期にも利用できる憩い空間を必要と考えている人が多いことがわかった。また、利用者の属性や行動によって、冬の現状に対する不満や、憩い空間を欲しいという考えに違いがあることが明らかとなった。そして、憩い空間にどのような要素が求められているのか、それが現在、さっぽろ地下街においてあまり満足されていないことも明らかとなった。

これらのことから、札幌の都心部には、重要度の高い要素をもった憩い空間が必要であり、また、サッポロファクトリーのようなある単独の建物としてではなく、都市の機能としての「憩い空間」が必要である考える。

—参考文献—

- 1) インターシティ研究会編：「あそび」が都市をつくる
- 2) 日本建築学会編：雪と寒さと生活 I 発想編
- 3) 日本建築学会編：アトリウムの環境設計